
人に知られぬ衝動

マリオネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人に知られぬ衝動

【Nコード】

N5110BA

【作者名】

マリオネ

【あらすじ】

柔道部の帰り道に裏路地に入るとそこには蹲る女と倒れてる男がいた。

初夜。裏路地にて。

最近部活の帰り道に感じる空気が段々冷たくなってきたのを感じる。あんなに暑かった夏ももう終わり、冷めた風が秋の始まりを教えてくれる。学校の夏服では少し肌寒かったが、歩いている分には心地よかった。

今年の柔道部はダメだったが、来年の柔道部は近年まれにみる良いメンバーで、このまま行けば大会も良い所まで行けるんじゃないかとも思う。まあ俺は軽いからスタメンでは無いけど、個人戦なら県までは行けるんじゃないかと思ってる。柔道は友人の誘いで高校から始めたので、個人で全国に行けるとは思わないけど、コーチにも目をかけて貰ってるし、体を動かすのは気持ちがいい。

「しかし疲れた」
コーチも今年は豊作だと喜び、俺らにエグイ位の練習をさせてくる。

「6分10本の乱取の2セットってなんだよなあ。コーチってば気合入りまくりだ」

まあ先輩達の代がだらしなかったつちゃそれまでだけど、コーチもコーチとして一花咲かせたいんだからしょうがないか。

「近道つと」

さつさと家に帰りたかったので、普段帰り道として使っている大通りでは無く、薄暗くて狭い裏路地を使う事にした。人通りが少なくお化けとか出そうだからあまり通りたくないのだが、キツイ練習の後だと自分がもの凄い強くなった気がして、暴漢一人位なら何とかなるだろうと思ってしまうので、最近使うようになってきた。

「あん？」

路地に入って少し歩いたら、震えながら肩を抱いて蹲っている奴が一人いた。

「うわぁ…恐っ」

着ているコートが汚くなかったからホームレスの類じゃなくて酔っ払いか何かだろう。しかし何故酔っ払いの倒れる場所は裏路地かゴミ捨て場と相場が決まっているのだろうか。本能的に大通りは人目に付きやすいと理解しているからだろうか？ だとしても、此処で倒れられたところで俺を怖がらせてるんだからやっぱり家に帰って潰れて欲しい。

よく見ると、女の先に路地の真ん中にもう一人倒れている奴がいる。超邪魔くさい。勝手に道で寝ている奴でも、跨いで行くのは心苦しいのだがしょうがない。

酔っ払い達に近づくにつれて嗅いだ事の無いような甘い匂いがしてくる。近くに来て気付いたが蹲ってるのは女だった。香水の匂いかな？んー、女の子と付き合った事ないからよく解らないけど、こんな良い匂いするんだ。

ピチャ...

「ん？」

足元に水たまりの感触がした。見ると倒れてる方の奴が出どころの様だった。『うわー：シヨンベンかよ、帰ったら靴洗わなきゃ...』なんて思っていたら、水たまりは結構大きくて、うわっ特大シヨンベンかよか思っていたら、どうやら違うみたいだった。尿かと思っていた水たまりは、膀胱の容量をはるかに超えている。

しかもよく見れば、どうやったのかは知らないが、そいつのわき腹が無かった。

「はあ!？」

恐らく死体だった。生きていても出血量からして、今から人を呼んでも助からないと思った。反射的に俺はそいつに近寄った。

「あんた大丈夫か!？」

揺すってみても反応は無い。あー：初めて死体みちゃった。救急車と警察呼ばないと。

そう思っただけで携帯を取りだそうとした時に、後ろの女は何をしていたのかが気になった。酔っ払いだと決めつけていたが、恐くて蹲っ

て居ただけかも知れない。振り返って声を掛けようとしたら、背筋にゾクツとした感覚を覚えた。柔道の試合で相手から向けられる敵意よりも何倍も濃い様な何かをぶつけられた気がした。

やばいと思うより先に体が動く、女相手に手を出すのはダメだとかは頭に浮かびもしなかった。視線だけ先に後ろに向けると女はさっきの位置よりこつちに近づいていた。体を向ける動作と共に、左手でコートの右襟を掴んで女に肩をぶつける。女が少し体制崩す時に右手で逆の襟を掴んで絞めながら引き寄せた。コートの下がチラツと見えた、血まみれだった、あ、犯人こいつっぽい。

しかし拙い、極まってる。咄嗟の事だったのと、肩をぶつけた時に女の左肩の方に間が空きすぎた。一応先手は取っているが、これじゃ落とせないし、ポケットにナイフなどを隠していたらまだ取り出せてしまっ、使われたら刺される。

「ふっ！」

右手を支えにして左手を落として足を払った。幸いな事に、相手は荒事の素人なのか受け身も取らず仰向けに倒れて、俺も難なく馬乗りの状態に行けた。すかさず右手を奥に入れたら右手も良い位置に取れた。極められる。力を入れた両手に感じる必勝の感覚。これならば相手は暴れる事も出来ずに落ちるだけだと体が勝利を確信した。「へえ、優秀ね。あなた」

女が何かを喋った、ありえない。首は完全に決まっているし、手に入れた力を緩めたなんて事は無かった。首の力が強いとか逃げ方を知っているとかが、そんな事は関係ない位に完璧な絞め。これをやられたらうめき声も上げられないはずだった。

「良い反応だったし、一度逃げたら追い付かれたときに心理的に勝てない事も知ってる。」

なぜ喋れるのかが恐かった。俺は一瞬前に感じた必勝の感覚を逃していた。女の手が俺の手を掴む。

「馬乗りになったら最悪でも逃げ切れるって思ってたのも良いわ。仰向けと膝立ちじゃ同時に、走り出した時のアドバンテージを守り

切れるとあの一瞬で考えた。いいわ、凄い優秀よあなた」

ゴシヤ

喋れても首が極まっているんだから相手は最悪動けても力は入らないはず。しかしそれに何の意味があるのか。もう走って逃げるしかないと考えたが、その前に女は俺の動きを止められた。腕を握り潰す事によって。

「えっ？」

逃げようとしたが、襟に指が引っかかって手が外れない。指に信号を送っても、回路を途中で切られてしまった。

痛かった。骨折や大きな事故の経験なんてした事は無かったが、多分出産くらい痛いんじゃないかな、これ。そんな現実逃避みたいな事を考えてしまうほど俺は絶対絶命だったし、正直もう助からなと思うし、なんでこうなったか訳も分からなかった。

「ぐあっ……」

痛すぎて叫び声も出せなかった。力を入れると痛かったし、腕も外れないので全身の力を抜いて無様に女に倒れ込んだ。

死ぬことを覚悟した。

俺がした行動は多分、全部最善策だっただろう。ただ、この女みたいな埒外の奴を相手に実行したのが間違이었다だろうな。裏路地に人が居たら近づか無いのが一番の最善策だったんだ、きつと。

「あら、諦めたの。よく頭が回る事ね。気に入ったわ。」

馬乗りのまま前に倒れたものだから、胸から女の声がする。せめて息苦しくなってしまう。

「普通は首だけど、もう我慢できないからこのまま行くわ。まあ取りあえずキープ」

女の声は上機嫌っぽくて、最後に聞いた声の上機嫌な物っていうのも中々体験できないだろうから、良い体験かなとか。頭は冴えてるけど、そんな間抜けな事を考えた。

「頂きます」

その言葉を最後に胸に食いついてきた。

「え？ 食われる？」

答えは得られなかったが、胸の痛みで体を離そうとしたが、女に阻止された。肋骨に女の歯が掛って、そのまま砕かれた激痛で俺は意識を離れた。

次に生まれ変わったら、裏路地に入らないようにしようなんて最後にフワッと頭に浮かんだ。

初夜。裏路地にて。(後書き)

読んで頂きありがとうございます。

よろしければ次回もよろしく願います。

初夜。マンション。

死んだ。一部の迷いもなく俺は死んだのだろう。最後の記憶じゃ俺は路地裏で会った女に胸を食われていた。きつと一杯血も出たし、痛い痛かったし、あの女もあそこまでやって俺を生かすなんて事はしないだろう。もう死んだんだしせめて天国が良いな。悪い事してないんだから、その位は神様許してほしい。目を開けると明るかった。

「うわあ、どつちか判断できねえ……」

なんか天井が見えるし壁紙っぽいし視界の端っこに蛍光灯が見える。案外天国も地獄も、俺たち人間が考えているような雲の上に立つとかそんなマジカルな話じゃなくて、現実と似ているのかもしれない。

で、結局どつち？

「どつちでも無いから安心しなさい」

俺は声のする方を向くと、あの路地にいた女がマグカップもって椅子に座ってた。

「うわあ！」

距離を取ろうとしたが、恐怖と驚きで腰が抜けて無様に後ずさる事しか出来なかったし、壁が近くてすぐ詰まってしまった。色々聞きたい事があったが恐怖で声が出てこない。

女は「ふむ」と頷くと、一度部屋を出た。女が居なくなつた事で、少しだけ冷静になれた。周りを見渡すと、どうやら此処が何処か解らないが、窓から見える景色が高い所だった事と、地元の観光名所であるタワーが見える事から、俺の町のマンションの一室な事がわかる。さっきまで俺がくたばってた場所は布団だったらしく、状況から考えてあいつがワザワザここに寝かせた様だ。後着ている服が学生服からバスローブへと変わっていた。

何が目的なんなのだろう。俺を食つといて俺を助ける理由がわか

らない。

「って、あれ？」

食われたのに生きてる。それに傷なんか一つも無かった。潰された腕も食われた胸も普通にある。強いて言えば頭が少し痛い位で、もしかしたら悪い夢でも見てたのかもしれない。確かに、帰りに女から暴行を受けて腕と胸を食われましたなんて現実感なさすぎる。

10分ほどして女が帰ってきた。その手にはマグカップが握られていて、俺に近づくなりそれを渡してきた。

「ブラックよ。砂糖とミルクが欲しくてもそのまま飲みなさい」

「はあ…。別にブラック平気なんで大丈夫です」

飲んでみたら普通においしかった。

「結構高い豆だからおいしいでしょう」

「はい、おいしいです」

……

……

「じゃなくて」

別にコーヒーおいしいとか言う話よりも聞きたいことがいっぱいあった。この女のはなしとか胸のはなしとか此処がどことかあの死体はなにとか。

「質問してもいいですか？」

女はどうぞと言った感じで手を振った。取りあえずマグカップは床に置いといた。

「じゃあ…俺がここに寝てる経緯とか教えてください」

女は少し考えた後に「どこまで覚えてる？」と聞いてきたので、取りあえず胸を食われた所までを説明した。結構冷静に話が出てくる自分に驚いた。それを聞くと女は「ふふーん」と足を組んで、「それ自分で言ってる本当だと思う？」

と質問で返されてしまった。それを聞いて少し力が抜けた。そうだな、あんな事現実に起こるわけがないんだから。でもそうすると俺はなぜバスローブ姿でここに居るのだろう。

「やっぱり、変な夢だったんですね。て言うかじゃあ俺ってなんで此処にいるんですか？」

「いや、現実だったよ。アレ」

シレッと言いやがった。解りにくい冗談か何かの類なのか判断つかないが、取りあえず俺が生きてて、傷もないんだから多分冗談だろう。そんな冗談のオチなんかよりも、ここにいる方が気になる。

「冗談だと思いついてもうとしてるなら無駄よ。アレはもう起きた事なんだから」

そしてまたまたシレッとぶち込んできやがった。

「私はあの男を殺した後、君を食べたの」

そう言つて、女はポケットから煙草を取り出して優雅に煙草に火をつけた。部屋が急に煙草臭くなる。

まああの時感じた痛みとかはリアルに思い出せるんだけど、本当にそんな事があったなら俺はもう死んでいて、天国か地獄かどっちか解らないがそう言った場所に居なければいけないはずだ。

「まあ本当だとしたら、なんで俺はピンピンしてるんですか？」

女は天井に向かってゆっくりと煙を吐き出すと、一拍おいてから話し始めた。とてもじゃないけど信じられないような話を。

「私に食べられちゃったからよ。…本当は痛いから嫌んだけど、取りあえずコレを見てから話に納得して頂戴」

そう言つて女は机から妙にごつついナイフを取り出して、近くにあった猫柄のゴミ箱を下に置き、その真上で自分の腕を削いで見せた。

「あ、ちょっとあんだ！」

「いったあ…。まあ見てなさい」

もう本当によく解らなかつた。急に腕を切ったかと思えば見て居るなんて。趣味なのだろうか？　そういうお茶目な。

「はあ！？」

驚いた。信じられない事に、女が切り取った腕の部分がもの凄く速さで再生していく。20秒もしない内に腕は完全に治っていた。

「と、言う事よ。多少エネルギーを使うけど、この位の傷はすぐ治っちゃうの」

「治っちゃうって…」

エネルギー？ よくゲームで出てくる単語が出てきたけど、この後の女の話はもっとファンタジーチックな話になっていった。ホラーかな？

「取りあえず人間離れたこの能力は見たわよね。理解した？ これが私たちの能力の一つよ。」

「はあ…私達って事は他にも同じ事が居るんですか？」

女はティッシュで血まみれの腕を拭きながら、こつちを見て「あなた」と言ってきた。

「いや、俺そんな特異体質持ってないです」

柔道やってるから良く傷が出来るけど、そんな早く傷治んないし。とか思っている女は首を振って「持ってなかつたけど、今はあるわ」と、俺に近寄って手を取ってゴミ箱の所まで引つ張った。すげえ力だ。

まあ嫌な予感のはしたんだけど、女はその予感通りに俺の手を削ぎやがった。

「いつて！ 何しやがる!？」

「動かすな!」

反射で引つ込めようとしたら、両手で止められた後に床が汚れると一言加えられた。ビクともしないのが少し悔しい。

「うつそお…」

本当にすぐ治った。え、俺そんな特異体質なかったよね。グジュグジュと治って行く自分の腕を見ていたらなんだか気分が悪くなってきた。

女は「わかった？」などと言いながら丁寧に俺の腕を拭きながらまた話し始めた。

「とりあえず自分が人間離れしちゃった事は理解できたでしょうから、本題に入りましょう。でも、もう大体予想がついてるわね。多

分それは正解。そんな風に仲間を増やすなんて解りやすいものね。
あなたはもう人間じゃないわ」

言葉が続けるほどに女の語調が興奮していくのがわかる。俺は視線を自分の腕から女の顔に移すと吸い込まれそうな妖艶な笑顔をしていた。

「人間卒業おめでとう。あなたは立派な吸血鬼よ」

初夜。マンション。(後書き)

読んで頂きありがとうございます。

ベタなお話ですが、よろしければこれからもよろしくお願いします。

初夜。決別。

「人間卒業おめでとう。あなたは立派な吸血鬼よ」

女は欲しいおもちゃが手に入ったときの様な顔で歓迎してくれた。今までの人生でそんなメルヘンチックな話と言うのとは、残念ながらあまり関わりを持っていなかったし、関わる気と言うのも無かったのだが、自分の腕が再生されていくのを見て自分の中に有ったなにかが滑り落ちていくような気がした。

滑り落ちて行く物が絶対俺にとって大切なものだというのは解った。得も言えぬ焦燥感。いや、滑り落ちた物の代わりに何か許容できない物に自分が入っていくのを認めてしまう様で。黙っていたらそれらを受け入れてしまう様な気がして、俺は何でもいいからこの状況を作り出した女を責め立てた。

「…人間卒業って、妙に芝居がかってますね。不安ですか？」

女は「へえ、それで」と言うと、俺の腕の血を拭き終わったのか、手を離してゆっくりと新しい煙草を取り出してまた火をつけた。

「そのセリフは胡散臭いと言うか予め用意されていた気がします。吸血鬼だって言うだけで良いのに人間卒業なんて普通出てこない。

俺にはもうあんたしか居ない様に思わせようとした。多分そんな所を感じます」

「私も同じ事を言われたから出ちゃったのよ」

女は腕を組み、少し恥ずかしそうに言いつた。

「その言葉の前に予想が付くでしょうって言いましたね。それはその後の言葉を自分で辿り着いた事にして、その事実を受けてしまう様な状況に追い込もうとしてる。」

しかもそれは成功してる。事実、俺は零れ落ちていく何かを止められないでいる。女は頷きながら足を組み、ゆっくり煙草を吐き出す。

「あなたが言った事は、私が昔に言われて思った事だわ。へえ案外冷静なのね。」

もう諦めがついてるのかしら、とも聞こえた。

「で、それが何で私が不安って事になるのかしら」

「不安じゃなかったら俺との会話の全てで先手を取る必要がないじゃないですか。」

「何の事かしら？ 私は普通にしてただけよ。おかしい所なんてあった？」

そう言っつて足を組み替える。そして俺は全く意味のない話をしました。

「初めに俺が起きたのを確認したら部屋を出たでましたよね。俺に考える時間を与える為と危害を加える気が無い事を刷り込む為に。

後は、俺が質問に答えて欲しい時と大事な時に腕と足を組んだり煙草をワザとゆっくり吸った後には優しく話しかけてた。話し相手に入り込む時のヤクザが良くやる手法だ」

「よく見てるわね。でも行動が全部癖で話し方が優しいって事で片付かない？」

「それじゃあ煙草とナイフで腕を切る時の説明が付かないんです」

「なんでかしら。別に煙草は好きだし、ナイフは現状を解りやすく説明しただけじゃない？」

女は満足そうな顔で聞き返してきた。出来のいい子供の答えを聞くように。

「煙草が好きかどうかは知りませんが、その本当にそのペースで吸っているなら俺が寝てる間も吸ってなきゃ可笑しいじゃないですか。この部屋が急に煙草臭くなったのってあなたが俺の前で煙草を吸い始めた時ですから。少なくとも俺が起きるまでは吸って無いです。だから煙草を吸うのはポーズだと思いました」

「そうね、じゃあナイフの方は？」

「初めから俺の腕を切るだけで済むのに、わざわざ自分の腕からやっただじゃないですか。そうする事で俺に『俺に説明する為に腕を切ってくれた』って思わせた。それは、俺から信頼感を得る為ですよ。ね。」

話の途中で女は組んでいた足をほどき、少しだけ前のめりになり、話の核心を待っていた。

「俺を飲むような空気を作ってたのも、今後俺を支配できるようにするための賤みみたいな物ですよ。まだ解らない事が多すぎて言い切れない事がありますけど、俺との関係を良く作って行くための布石だと思えます。」

女はおどけるように少し笑った。

「ちょっと己惚れてるのかな？そんな心理的に上にならなくても、肉体的に強いんだから力で言う事聞かせることが出来るわよ」

わざとらしく背もたれにかかり、困ったように首をかしげるようなポーズをとった。

「憶測ですけど、将来的にそれが出来なくなるんじゃないですか？もしくはそう言う事が出来なくなる可能性がある。それが不安だから俺と仲良くならざるを得ない。」

大事な所が憶測だけど此処が核心だとおもつ。今はまだ俺なんか殺せるのに後々に力関係が変わってしまった時に恨まれないようにするために情を持たせる。じゃないと俺を安心させたりさせない。

そこまで聞いて、女は褒めるように喋りはじめた。

「うん。大概是当ってるわ。まあ穴だらけだったりするけど、貰えたヒントだけでそこまで解るなんてやっぱり優秀ね、あなた。」

穴だらけ。そう、結局の所、今何故俺を生かしてくれているのかは解らなかった。

女は見透かしたように続けた。

「言ってる間に自分の頭の中を整理できたでしょう。最後にはあなたが私と同類になる前提の話まででたし。まあまだ信じ切れてはないでしょうけど。でも思ってたよりいい子だわ、あなた。意図に気付けてからそのレールに乗ったところとかも狡猾。勇気があるのは襲われた時に解ってたけど思ってたより優秀。強いて言えばもう少し頭が悪い方が良かったけど。」

いいわ。キープ続行って事で。取りあえず今は死ぬ心配とかしない

でいいわよ。」

始めは流れていく何かを守るためだったけど、もうそんな物は消えていて、ただ八つ当たりしてただけだった。けれど、敷かれたレールに気付いた。あまりにも明確なボディランゲージを見せつけられた。

それに気づいてからは、そのレールを間違いなく添わされるだけ。踏み外したら、一度殺されている分、現実的に殺されるかもしれないと恐怖した。圧倒的な敗北感。この女は俺をただ測りで測ってただけなのが悔しかった。

ただ、キープを告げられた俺は女に聞こえない様に少し溜息をついた。取りあえず今は殺される事がなくなった事に安堵した。これだけ色々やって直ぐに殺されると言う事は考えなくてもよさそうだった。

「ねえ君さ、始め本気でナマいつてたでしょ」

そうですとは言えずに視線を逸らすことで答えた。

「あの路地で君を選んで殺さなかった事を盾出来るって踏んだから言えたと思うんだけど、それは流石に盾として弱いと思うよ」

思っている事は本当に大概見透かされていた。

初夜。決別。（後書き）

ありがとうございました。

よろしければこれからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5110ba/>

人に知られぬ衝動

2012年1月15日03時46分発行